

ノロの衣装と祭具 ——奄美の龍繡胴衣, 他——

下野敏見※

一. はじめに

奄美大島の中央部西岸に地を占める^{やまとそん}大和村は、民俗学から見てたいへん興味深い所である。いろいろ貴重な文化がゆたかに伝えられているのである。

これまでもたくさんの方が訪れて研究をなされているが、私もこれまで何回も訪ねてたくさんの方々に接し、見聞を重ねてきた。

平成十五年一月二十二日には、鹿児島県文化財課の月野功氏と訪れ、大和村教育委員会（教育長中山高栄氏、その後任は永田世史氏）の社会教育係長郁島武正氏のご案内によって、村の文化財審議委員の方々（御同行された方は、平瀬達郎氏（津奈久）、大崎忠通氏（大和浜）、川畑直光氏（名音）、元継男氏（湯湾釜）、今田良文氏（今里）、戸内辰二氏（戸円）、宮園聖氏（思勝）、教育委員会の三田富貴子さん）と村内のノロ遺品の調査をした。

そして大金久^{おおがねく}、今里^{な おん}、名音の順に訪ねた。その後、平成十六年十月二十一日、諸鈍芝居の調査のついでに、瀬戸内町学芸員の町健次郎氏と大和村を訪ねて、中央公民館に移管された大金久のノロの遺品を再度確認した。ついで、平成十七年二月十六日、中央公民館を訪れ、大金久ノロ遺品を再三確認した。この両度の調査の折は教育長は永田世史氏であった。現地では、中央公民館館長の元山安雄氏にたいへんお世話になった。また、館員の中山昭二氏にもお世話になった。

二. 大金久のノロ遺品

昭和四十四（一九六九）年夏、私が聞いた大金久のノロ組織は、オヤノロ（一人、元平シゲ子、四十歳）、ウワワキ（上脇、一人、武山）、シャーワキ（下脇、一人、^{かない}叶ヶサ）、スドウガミ（船頭神）ほか数人。以上はカミニンジョウ（神人数）である。

オヤノロは、集落代表の祝女^{の ろ}であり上脇・下脇のノロは、集落内の一族代表である。スドウガミ等も一族ごとに出る。昔は神役に選ばれるのは名誉とされたが、今は敬遠される傾向がある。

カミニンジョウの決め方は、ヒキビキ（血筋）が決まっているので簡単である。その決め方は、男の兄弟のあとにはゆずらず、女のヒキだけにゆずる。

オヤノロは、未婚・既婚をとわず、集落内より選び、十三～二十五歳の女性中から籤引きで決める。

トネヤは一つある。人は住んでいないが、普通の家と同じもので、数十年前はトネヤのそばに

※元鹿児島大学教授・鹿児島民具学会々長

アシャゲがあって、子供たちの遊び場になっていた。いつもあけっぱなしの家をアシャゲのようだという。

ノロの関係する祭りは、①二月のオムケ（^{はつみずのえ}初壬の日）、②四月のオーフリ（初壬の日）、③キシキユマ、④七月浜祝い（初壬）、⑤八月十五夜、⑥九月九日、⑦十一月のフユルメ（冬折目）などがある、野菜、^{みき}神酒、飯、芋などを供える。

大金久には、神山はあるが、テラヤマ、オボツヤマなどはないという。

右の調査から三十数年をへた平成十七年の現在、オヤノロも亡くなり、ノロの祭りはとだえ、ノロ遺品はトネヤに、櫃二つに入れてだいに保管されてきた。ミヤーの脇に建つトネヤは集落民のよき管理によって今も健在である。

さて、平成十五年一月、先に記した一行が訪れると、区長の前田源二氏（昭和十一年生）が待っていてくださって、トネヤのノロの箱のうち一つを開けて見せてくださった。もう一つの箱は、金具がいたんでどうしても開かないと言う。

私は、箱の中から一つ一つをていねいに取り出して、トネヤの畳の上にひろげた。そして一つ一つ計測し、撮影した。一時間近くたって委員の先生方に解説をしてほしいということで、現物を見ながら説明した。本稿でも、その順番に番号を付けて記述しよう。説明は、要点を述べたが、記述は詳しく記す。

先生方は、ノロの遺品については、自分たちもめったに見ることはなく、その意味も知らなかったが、今日はたいへんよく分かり、よかったといってください。

解説の中心は、龍の刺繍のある^{と きん かみおうぎ}胴衣と神扇（大扇）にあった。特に、龍の付いた胴衣は私もはじめて見たすばらしいもので、奄美群島内にはほかに例はなく、沖縄県にもないと思ったので、その貴重性を訴え、今はもう保管だけしているのであれば、早いところ、中央公民館の収蔵室へ移管し、保存を厳重にしたらどうですかと、区長さんに頼んだ。

そのせいかどうか分らぬが、区のほうでも協議され、半年ほどのちにぶじ収蔵室へ移管されたのである。あとで、伝え聞いた私は、将来の保存のためによかったと思い、ほっとすることであった。

^{りゅうしゅう}龍繡胴衣のすばらしさに委員の先生方も目を見張っておられたが、神扇の表面・裏面の絵の意義、特に表面のティダ（太陽）と鳳凰、瑞雲の絵は、琉球王国の昼の世界すなわち国王の支配する政治世界を表わすのに対し、裏面の月とハベラ（蝶）、瑞雲、花の世界は、夜の世界すなわち間得大君の支配する精神世界を表わし、両面ともに描かれた上下の鋸歯紋は、その世界すなわち琉球王国を守る意味であり、この扇を琉球王国からノロがいただいて、村々の祭りにのぞむのであるという趣旨を申したところ、深くうなづいてくださった。

^{きぬきちぎよくりゅううんげんほうおうこうもりしゅうどきん} 1. 絹黄地玉龍雲嶮山鳳凰蝙蝠繡胴衣

先に述べた龍繡胴衣である。

^{ごそう}（1）五爪正面龍 まず背面上部にある龍（写真Ⅰの①）について述べる。これは正面龍である。

五爪龍で、尻尾は左後下に伸ばし、後足二本は左右に開いてかまえ、前足二本は水平にあげていて、右足（手）の五本の爪では丸い、白、青、うす緑、茶色の玉をしっかりとつかんでいる。

胴はとぐろを巻いた蟠龍^{ばんりゅう}の姿をし、目はくわっと見開き、口は大きくあけて、上下の白歯二本ずつと、その両脇の牙二本ずつが見える。胴は頭の上にも出て曲がり、胴全面に鱗紋がびっしりと付いている。胴の下にそって、先と同じ白、青、うす緑、茶色の細紐みたいなのが付いているが、実はこれは龍の腹だ。蛇腹に相当する。

四つ足には、中ほどに鋭い牙のような白い剣があって、それは右足は上下とも五本、左足は上足に四本、下足に六本付いている。胴の背にも同じような白い剣がびっしりと出ていて、尻尾には長いのが十本出ている。頭上には白い角が左右に生え、その上側と下側には青い角状のひげが左右五本ずつ生えている。それらの間にも白でふちどりされた茶色のひげが生え、少し風になびくさまで、龍顔をひき立てている。

鼻の両下脇には、白いひげが生え、うす緑色の口ひげもある。あご下には、緑色のあごひげが左右三本ずつ伸びている。

右足（手）に持つ玉の中心の茶色は、よく見ると、実は玉に沿う瑞雲であった。瑞雲は、茶、青の雲を白色でふちどりして鮮やかである。雲の中には、ただの雲ではなく、何かしら動物のような形をしたものもある。これは、螭龍^{ちりゅう}すなわちみずちだ。角のない龍である。それで、螭龍雲といたほうがよい。

龍の頭の少しはなれた左右には、一見、雲みたいなおかしなものが見えるが、よく見るとその中央に頭があって両眼が付いている。形状からすると、これは蝙蝠^{こうもり}だ。白と青で巧みに描いたようになっている、飛行している姿だ。蝙蝠は吉兆の動物といわれる。

また、その脇、肩の上には二本足を伸ばした鳥らしきものが見える。これについては、あとで述べよう。

さて、この龍は何者か。なぜ、こんな姿でノロの背中にいるのか。奄美のほかのノロの胴衣の背は、三角布を接ぎ合わせたハベラ胴衣が多い。こんな胴衣例はない。そのルーツはどうか。

これは正面龍だ。威厳のある姿だ。これを着るのはただの人ではない。ノロが着るならば、村で最上級のノロでなければならない。琉球王国の聞得大君から任命された奄美大島の上級ノロは大あんしゃりという。そのノロには、島津支配後は、ノロの純粋性を保とうとする眞須知派と大和人と結婚してもよい須多派の二系統があり、大和村から南は眞須知派が、名瀬から北は須多派が管轄していた。また、この二派の代表のノロは王府に行って「首里の印」の辞令書をもらっていたので、「御印加那志」ともいった。

すると、これは、眞須知の代表ノロがかつて琉球王府に出向いて任命されたとき、拝領したものであろうか。

この手のこんだ刺繍、さらにあとで述べる他の部分のデザインや布地の製作技術は、当時の奄美にはまだなかったようで、沖縄あるいは外国によるものであろう。この辺のこともあとでまとめて述べよう。

沖縄には、この龍繡胴衣と同じようなものは昔もなかったのだろうか。いろいろ文献を当たってみると、実はあったのである。それは、大正末年から昭和初年にかけて精力的に沖縄各地を調査し、たくさんの写真に残した鎌倉芳太郎氏が著した『沖縄文化の遺宝』（岩波書店）である（注1）。国王が着用する大礼服の中に、ほとんど同じような図柄があった。いや、国王の平常着用の羽織にもあった。それらは五爪龍の正面龍で、眼を見開き、大口をあけているが、玉は前足（手）ではなく、とぐろの中心にある。

琉球王の衣服の正面龍のルーツも検討する必要があるが、それは後述するとして、その前に大金久胴衣の龍の下に刺繍されている別の絵も見なければならない。

（2）^{けんざんせいかい}嶮山青海波 写真のⅠの①および⑤を見ると、龍の下に刀のような鋭いものが三本ずつ三ヶ所に見られる。その下には半円形の波型と渦巻きのようなものが見える。これらは何か。

実はこれは、琉球国王が中国皇帝に献じた品物の中にも見られる。たとえば、^{こくしつかんらでんそうりゅう}「黒漆嵌螺鈿双龍戯珠長方攢盒」という四角い容器や^{こくしつかんらでんそうりゅう}「黒漆宝珠龍嶮山螺鈿東道盆」という四角い盆などにも、美しい螺鈿の図が見られる（注2）。これらの品物は、皇帝への献上品であり、北京の故宮博物院にあるものだが、それだけに実にこまやかで美しい螺鈿技術で、感嘆せざるをえない。

これと先の胴衣の龍は、螺鈿と刺繍というちがいはあるものの、共通する繊細さ、美しさがある。琉球と中国の交流の歴史は古いが、進貢船が琉球国王の献上品を積んで行ったのは、明・清代にさかに行なわれた。それで上の品物が明代のものか清代のものか、にわかには決めがたいが、その成熟した作風からすれば清代のものであろうか。宮里正子氏によると、清代の一六六六年や一七二五年に貢上した龍螺鈿の漆器もあるという（注3）。しかし、琉球王府による奄美ノロへの下賜は、慶長一四（一六〇九）年以前であることからすれば、明代のものの可能性が高い。

ところで、胴衣の刀のような三本のとがったものは、嶮山つまりけわしい山を表すが、龍とむすぶそれは、崑崙山を意味する。

崑崙山は中国の古代（前漢の頃）の書である『淮南子』によると、高さは一万一千里もあって、その上に穀物のみのる樹があるという。それを中心として四方に珍しい宝樹が茂っている。そばには九つの井戸もある。野菜畠のそばの池には、黄水がたたえられ、その水は三周して水源にかえってくる。これを丹水といい、飲むと不死を得るという。

崑崙山の倍の高さの山を涼風山といい、そこに登ると、そこでも不死を得ることができる。その倍の高さの山を懸圃^{けんぽ}といい、これに登ると靈力がそなわり、風雨を使役できる。さらにその倍の高さに登ると、そこは上天であり、天帝の居場所である。ここまで登ると、神になる、というのである（注4）。

龍繡胴衣の嶮山の麓と頂には、唐草紋が左右対称にいくつも見られるが、見方によってはそれは樹木の茂みのようでもある。『淮南子』よりも古い中国古代（周・秦の頃）の書『山海経』によると、崑崙山には丹木という樹があって、赤い茎、祝いの葉、黄色い華、赤い実がなる。その実は飴のようにおいしく、食べると飢えないという（注5）。

胴衣の嶮山の中央の山は、龍の胴の向こうがわに蟠^{ばん}（とぐろ）を突きぬけてそびえている。天

帝の居場所までとどいているのであろう。この胴衣を着るということは、琉球王ならば、天帝であることを示すものである。だが、女性ノロが着るということはどういう意味か。ノロの身を守るのであれば、龍だけで十分であろう。龍と嶮山の組み合わせの図柄は、もともとやはり王あるいは皇帝の着衣であろう。

嶮山の図の下の中半円形群は、波であり、青海波である。白、うす緑、緑、青色の糸を使って刺繍されている。その下部には、たくさんのうすまき状の模様と、それから伸びる線が何本も見える。この線は、波頭の線であろう。波群の左右に立つ、^{わらびもん}蕨紋は、大きな波頭を表しているであろう。永尾龍造著『支那民俗誌』によると、中国の皇帝の礼服の裾にある同じような模様について、裾の方には海水の湧き上がるような美しい模様がある。これを「海水江牙」^{ハイシュイチャンヤ}という、とある(注6)。

なお、『山海経』には、丹木から丹水が流れ出ていて、その水の中に白玉が見られる。その玉は、五色の光を發し、柔剛をやわらぐ。天地の鬼神、これを食らい、酒盛りをする。君子は、これを服すると、不祥を防ぐのだ、という(注7)。

胴衣の龍が右足(手)に持って掲げ示す玉は、この丹水の中の玉であろう。その玉で、着衣している者の不祥を防いでいるのである。

(3) 鳳凰 龍の左右上方に二本の足を出して迫っているのは、鳳凰である。

左手の鳳凰(写真Ⅰの②)と右手の鳳凰(写真Ⅰの③)は、全く同じ形態で、左右対照になっている。嘴を開き、舌が見える。^{とさか}鶏冠が品よく乗り、目があつて耳もある。あごひげがふさふさと付いている。頭下の緑色の短い羽毛は首にも付いている。首は細くぎりつとまがつて長い。頭から首、胴下は金茶色と白色の糸で表している。

胴は短い羽毛がいっぱいあるが、うす緑、緑の糸を續かせてその上を白糸で菱形に縫って押さえ、鱗状の模様を出している。羽は、ひろげ、飛んでいる姿である。いや、両足を下に向けて出し、そろえているのは、着地しようとしている姿であるといったほうがよい。

それは、崑崙山の最頂点の天帝の居場所に、今、鳳凰が二羽、着地しようとしている場面であり、天帝を祝福にやってきたのである。そのとき、鳳凰の近くに二匹の蝙蝠も姿を見せて、祝福している。

鳳凰の羽は、前の端は金茶色の糸で、中と後は、うす緑、緑、うす青、青の糸を使って、こまやかに羽毛を一本、一本、描いている。羽の先端部には、まるで飛行機の翼の先端がちよっと折れ曲がっているような、かっこよさをつけている。そして、後には白い剣のような羽毛が五本ずつ付いている。

尾は、色とりどりの紐状の尾が十本ずつ風に流され、揺れている。その長い三本だけは、鋸の歯のような切り込みが入っている。よく見ると、すべて左右対称の中に、この尻尾だけが、その色が対照になっていないのである。雌雄の別を表わしているのであろうか。それにしても、実に見事に、こまやかに作った刺繍である。

辞典(広辞林)によると、「鳳凰の鳳は雄、凰は雌で、中国で想像上の鳥。高さ五、六尺。頭は

鶏、首は蛇、顎^{あご}は燕、背は亀、尾は魚に似て、羽は五彩をもち、声に五音がある。…」とある。この中の「頭は鶏、首は蛇、顎は燕、背は亀」というのはきわめてよく似ている。首はぐにゃつと曲がって、気味悪い。よく見ないと首には見えない。「頭は鶏」はまさにその通り。「背は亀」も、先に述べたように白糸で菱形にこまめにぎっしりと縫って、まるで亀の甲羅のようだ。「尾は魚」に似ず、むしろ雉の尾みたいだ。

(4) 五爪双龍雲 胴衣前面の左右の前身頃の龍(写真Ⅱの④⑤)は、飛龍で、外に向いて大口をあけて、着衣者を防御している。五爪双龍で、前足をひろげ、後足もひろげ、尻尾を出し、周りにはみずき型の瑞雲(螭龍雲)を配し、まさに飛翔している。

頭を見ると、牙が上下二本ずつあって、その間に白歯が二本ずつある。白い鼻ひげは長く、威厳がある。目二つ、鼻の穴もある。頭上にある大小七本の白いひげの束は、剣のように伸びていて、貫禄がある。

龍の周りにしたかうみずち雲すなわち螭龍雲は、八つずつ、白、うす緑、青、茶などの色のみずちである。龍に合わせて左右へ飛んでいる。どのような悪霊や災厄、病気も噛み殺してくれるぞというようなかまえである。

(5) 袖先の青海波 左右袖先(写真Ⅱの②③)には、別布を継ぎたして、長くし、青海波一つと、下に波頭線、上に唐草紋を配してある。これは、別布に刺繍した一連の青海波を切ったものを当てたものである。

青海波と嶮山^{おくみ}は左衽の布にも見ることができる。これは横を向いていて、別布をここに利用したことを物語っている。作者としては、双龍と関連させて、崑崙山と青海波で、天帝のいる聖なる場所のつもりか。それにしても、この部分はよく使用されるせいか、布地が少しあせている。右衽布には青海波をつけてある。

(6) ひもと二目落し縫い^{ふためおと} 胴衣の両脇はあいている。その長さ三七.五cm。その上、つまり脇下、それも袖付け根から八cm下に、ひもが左右に三本ずつ付いている。左衽下にも三本、右衽下には一本、合計一〇本のひもが付いている。

左右脇下および左衽下の三本ずつのひもは、その場所の上から二本、下から一本付けてあって、上の二本は茶色で少し幅が広い(二.五cm～二.八cm)のに対し、下の一本はうす緑色で少し幅が狭い(一.二cm～二.五cm)である。左衽下の三本の場合も同様であり、右衽下の一本はうす緑色のひもである。

胴衣をむすぶひもは、中のほうは、右衽下一本と左脇下一本と結び、外のほうは、左衽下一本と右脇下一本で結べば十分である。つまり、四本あればよいのに、あと六本は何のためか。六本の余りひもは、動くたびに、あるいは風が吹くたびに、ひらひらと揺れる。それは美しくもあろう。しかし、それだけではない。

衿まわりと左衽下、左衽下、右前身頃^{つま}は、二目落し縫いである。特に左衽下は、二目落しで三列縫いである。頑丈にしてある。これは、懐への入口をシャットアウトし、悪霊の侵入を防いでいるのである。

このことからすれば、ひもが一〇本もあるのは、やはり余りの六本で悪霊を追い払い、場合によっては、しばりあげてしまうぞ、という意思表示ではなかろうか。つまり悪霊はらい、魔よけである。

このことは、背面の正面龍も、前面下の双龍も、みずち雲も同主旨である。

大和村ノロの胴衣は、ノロをだいに、だいにして、諸仕かけによって厳重に守っていることがわかる。ノロは集落の豊饒と安全を守る生き神様であるので、これらのノロの防災設備は、とりもおさず、集落の防災をし、そして豊饒と安全を招来するという住民の願いがこもっているのである。

いや、この胴衣が琉球王国から下賜されたものであれば、この願いは琉球王国の願いでもあり、大いなる期待なのである。

(7) 織り方と接ぎ方 絹織物のこの胴衣は、撚らない絹糸を縦にして織ってあるが、その縦糸すなわち経糸は、六つとび一つくぐりで左右に一つずつずらして織った縹子織りである。したがって表面がやわらかで光沢がある。

背面は背のところで上下に縫い目が入っている。つまり、右後身頃と左後身頃の布をついで作ってある。そして、その上に刺繍し、上下のつぎ目（接ぎ目）の上から刺繍してあるのだ。これは接ぎ方が先であって、刺繍はその後である。

ところが、前左右の身頃の双龍の刺繍がある部分（四角形、写真Ⅱの④⑤）の布は、他部分と同じ織りであるけれども、六つとび一つくぐりの糸は横になっている。でも六つの螭龍雲を従えた五爪飛龍は、正しい向きになっている。このことは、この左右の前身頃の布は、意図的に六つとび一つくぐりの糸布をこのように横に横に接いだわけである。

前に見えている左衽布には、剣山青海波の刺繍をしてあるが、その布は胸部分と同じ経糸が六つとび一つくぐりである。かくれている右衽布も同じで、刺繍は青海波の一部である。なお、両衽先端の接ぎ布も、同じである。

さて、これらの布の接ぎ合わせと刺繍はどちらが先かというと、背面部は先に述べたように身丈線の接ぎ方が先である。

しかし、その両脇を見ると、刺繍したあと、裁っているのがわかる。ということは、左右後見頃の布を背面のみ接いだあと、背面の正面龍を中心とした剣山青海波および、蝙蝠、肩の双鳳凰などの刺繍をしたのである。そして、双飛龍の布および前（左）衽布・後（右）衽布や両袖先の布を接いだのである。これらのあとから接いだ布は、刺繍してからのものである。

前衽布の剣山青海波は、山が右横を向いてやや不自然であるが、青海波が上下にのびてちょうどよい印象になっている。製作者もそう思って付けたのであろう。

このように見ると、この胴衣は、できあがった布を背のみ接いで、刺繍し、同じ所で前左右身頃の双飛龍布や袖先も接いで仕上げたのである。ひもはあとから別地で付けることもできるが、胴衣と同じ布であるので、やはり同製作所で付けたと考えられる。

その同製作所とはどこか。この精巧な織りと刺繍は奄美ではないとすれば、拝領元の琉球であ

ろう。

つまり、はじめからでき上がった胴衣を琉球王府からもらったのだと考えたほうがよい。

(8) 寸法 この胴衣の身丈は、六三・五 cm で、衿は六六・五 cm、肩幅三〇 cm、袖幅三三・五 cm。袖先の横長さ一六 cm、袖口の長さ一六 cm。

衿幅は右側が六・四 cm、左側が七 cm。衿下の長さは右が三八 cm、左は三七・二 cm。左前身頃幅は上部が二九・五 cm、下部は三三 cm で、高さは二八 cm。右前身頃幅は上部が二九 cm、下部も二九 cm で、高さ二七 cm。ただし、右前身頃の袂は高さ二・八 cm の別布を接いである。

左衽丈は五〇 cm で、衽幅一四・七 cm。その衿下の高さ三六・七 cm。右衽丈四七・五 cm、衽幅五五 cm、衿下の高さ三八 cm。ひもの長さは前に記した。

(9) 二目落し縫い 左衽布の左右には、上下に二目落し縫いをしてある。その一方すなわち衿先の下には、三列にそれをほどこしてある。また、右衽にも一列の二目落しが見られる。

なお、衿の周り上下や右前身頃の袂にも同じ縫い込みをしてある。これらは、悪霊がノロの体に入るのを防ぐ防御呪縫であることは、前にも記した。

(10) ルーツを探る これまで述べたことによって、大和村の龍繡胴衣は沖縄で製作され、奄美大島での上級ノロ大あんしゃりが上沖し、聞得大君からノロ叙任書をもらうとともに、この胴衣ももらったものと思われる。その時期は、ノロ上沖が禁止される島津氏奄美支配より以前でなければならない。すなわち一七世紀初頭以前でなければならない。

沖縄の織布・刺繡の技術は、早くから沖縄にもたらされていたと思うが、そのルーツは中国および朝鮮であろう。

まず、朝鮮から見ていこう。依田千百子氏によると、

「朝鮮では、王は龍神の子孫、龍神の裔であるという観念が古くからあり、新羅の始祖、朴赫居世の王妃、閼英夫人は、鶏龍あつえいの左のわきから生れたと伝えられている」「王のシンボルとしての龍の観念は、次の李朝時代にも引き継がれた」(注7)

という。そして朴赫居世の次の「高麗王朝でも、王家は海龍の後裔であるので、皆必ず、永きに龍鱗があるといわれてきた」

といわれるのである(注8)。依田氏は、同じ文献に、王の常服「袞龍袍こんりょうぽ」の図を示され、「赤色または黄色の絹で作し、胸と背と両肩に五本の爪を持った龍を金糸でまろく刺繡する」と説明され、その丸囲いの刺繡の龍が正面龍であることも図示されている。

玉は、龍のとぐろの中にある。その玉は民衆がその力をいただこうと願う「如意宝」であるとしている。『山海経』に記された鬼神による酒盛りの源泉であり、君子の不祥を防ぐ玉は、なんでも願いの叶えられる如意宝になっている。

大和村の胴衣には丸い輪はないが、正面龍である点は一致する。ただ、龍の尻尾は右側に付けられている。しかし、『韓国の民俗文化財—服飾と信仰資料編』では、皇后の大礼服の前胸に付けた丸囲いの龍は、尻尾は大和村の胴衣と同じく左側にある。王の常服で執務服である袞龍袍は龍補ともいわれ、丸囲いの正面龍が前一つ、両肩計二つ、後背一つの合計四つ付く。

王妃の小礼服には、雲と鳳凰を刺繍した四角形の補章を付けてある。李朝では、王や王妃、王子には丸囲い龍を付けたのである。その場合、王は五爪龍、王子は四爪龍、孫は三爪龍であった。ソウルの民間人保管の丸囲い龍は、嶮山、青海波の刺繍も見られる^(注9)。

吉成直樹氏によると、琉球王府の中に朝鮮半島系の人たちがいて、琉球王国形成に影響した可能性が大きいという^(注10)。琉球王府経由の大和村の龍繡胴衣への朝鮮からの影響ということも可能性がある。

では、中国ではどうか。『支那民俗誌』によると、丸囲い龍は「團龍花」といい、通常の清の皇礼服には胸と背の三ヶ所に付け、大礼服はさらに両肩にも付けた。この大礼服を朝服といった^(注11)。

ところが、別の清の皇帝の礼服には、胸に丸囲いでない正面龍を、両肩にも龍を付けている。龍の玉は蟠^{ばん}の中に輝かせ、蟠の下には蝙蝠らしいのが一羽見える。そして瑞雲。

前下には双飛龍が左右の外を向いている。またその下には嶮山青海波が見え、青海波の下には先記の言葉をくり返すと、大和村の胴衣と同じように、「海水の湧き上がるような美しい模様、海水江牙^{しゅいちゃんやー}」がある。嶮山は高く、鋭く、上を突いている^(注12)。『支那民俗誌』には、これを「龍の模様を織り出したもので」とあるけれども、刺繍のようにも見える。これは、絵を写真にしたものであろう。

中国では、国王の礼服「袞龍袍^{こんりょうぽ}」の服制は、ずいぶん前からの伝統らしく、中国古代の『詩経』にも刺繍による龍紋の衣があったという^(注13)。

一七世紀に清朝は、サハリンのアイヌに対し、官位を与え、清朝役人の官服の「龍袍」を与えた。そうした品がアイヌ社会に入り、市立函館博物館等にある「龍袍」がそれである。これは比較的に新しいけれども、中国を源とする「龍袍」はアイヌへ渡り、「蝦夷錦」となった。一方、沖縄にも渡った。しかし、沖縄ではのち、自作したようだ。

こうなると、大和村の胴衣は、中国からの影響と考えることもできよう。つまり、韓国からの可能性もあれば、中国からの可能性もあるということだ。いったいどちらであろう。こちらだと、今の段階で断定することはできないが、図柄等から見ると中国からのほうがつよいようだ。

大和村の龍繡胴衣は、朝鮮や中国の皇帝が着ていた礼服ではない。それと意匠がきわめてよく似たもので、ノロの体に合わせて作り、ノロが着た礼服である。ただし、この上から大袖衣を着けていたと思われる。

したがって、この胴衣は、朝鮮や中国の影響をうけて、沖縄で織った地布に、沖縄で刺繍して作ったノロ専用礼服である。ただ、五爪蟠龍^{ごそうばんりゅう}は、国王用なのに、どうしてノロに下賜したのか、分かりにくい点である。この疑問を解くには、布地の輸入の研究と背景の歴史のこまかい検討が必要であろう。ただ、このような格式のある胴衣を下賜されたノロは、奄美大島の中でも最有力なノロであっただろう。それは、正統派を唱え、大和村以南を統轄した眞須知ノロであっただろう。

正面龍のデザインは、古くは数千年前の良渚文化の玉器にも見られ、三千年以上前の殷周時代の青銅器にも見られる。それは、とぐろを巻いた蟠龍である。大和村ノロの着た胴衣の龍は、こ

のようにとてつもなく古い伝統文化を背景にしているのである。

2 神扇

大金久の神扇^{かみおうぎ}は三本。スペースの都合で略記しよう。

(1) 黄地日輪双鳳凰瑞雲神扇^{き ぢ にちりんそうほうおうずいんかみおうぎ} (写真Ⅲの②)

表は竹骨一本。上下に鋸歯紋列。鳳凰は斜め下から見た図になっている。扇の長さ(骨の長さ)五八.七 cm。広げた左右角の長さ一〇四.五 cm。日輪は赤色。

裏は、白い月輪に瑞雲。上下に鋸歯紋列。

(2) 黄地日輪双鳳凰瑞雲神扇 (写真Ⅲの④)

表は竹骨一三本。上下に鋸歯紋列。鳳凰は上から見た図。扇の長さは、五四.五 cm。広げたときの両角をむすぶ線の長さ八七.五 cm。日輪は赤色。

裏は白い月輪に瑞雲。上下に鋸歯紋列。

(3) 黄地日輪双鳳凰瑞雲神扇

表は竹骨一五本。上下に鋸歯紋列。鳳凰は上から見た図。扇の長さ、五四.五 cm。広げたときの両角の長さ、不明。日輪は赤色。

裏は、赤い月輪と立岩に菊花瑞雲。蝶はいない。上下に鋸歯紋列。

3 サジ

白の木綿布。両端に房^{おおそでぎん}ひも。幅三三 cm で、長さ二七八 cm。

4 大袖衣

(1) 木綿白地平織広袖長衣神衣^{も めんしろ ぢ ひらおりひろそでちやういかみぎん}

木綿の晒で、身丈一〇一 cm で、衿^{ゆき}五八 cm。袖幅二八 cm、袖丈四一 cm。衿幅は上が五 cm で下は四 cm。袖脇下は閉めてある。

(2) 木綿白地平織広袖長衣神衣

木綿の晒で、身丈一二二 cm で、衿七三 cm。袖幅四〇 cm、袖丈六四 cm。衿幅七.五 cm。袖脇下はあいていて、ヤマト縫い。衤丈一〇五 cm。

5 神衣・神具の収納箱^{かみぎん しんぐ}

杉製黒塗りの箱で、ふたをかぶせた縦の長さ三三.七 cm。横六三.五 cm。高さ三九 cm (ほかにもう一つ箱がある)。

6 玉入れ袋

麻の平織りで格子模様。首飾りなどの玉の収納袋。大きさは、三八.五 cm × 三〇 cm。

7 首飾りとビーズ玉 (省略)

8 サハリ^{かね} (鉦)

径二十.四 cm で、ひも穴が二ヶ所ある。

9 薄赤褐色布片

余り布か。草花模様が織り出された布。紗綾^{さや}か。五片あるが、そのうちの大きいのは、幅三〇

.五 cm で、長さ一五一 cm。

10 刀一振り（脇差し、長さ六四 cm）

11 花瓶・香炉（焼物）

12 文書（「神祭り名簿並に規約證書」、「神口證類」、「神事規約」、他）

三. 今里の神衣, 他

今里では、トネヤに神衣, 他を収納してある。神扇は骨のみ六本で、長さ七七 cm。大金久に比べて、ずいぶん大きい扇だったようだ。今里で最も注目されるのは、麻布のズボン型神衣（股引）でこれが五着（写真Ⅲの⑥）。シャツに似た上着型が二つあって、どちらも両眼と小さい口だけあいた頭巾付き。もう一着は股引と上着、頭巾が一つになったもの。頭巾はこれも両眼と小さい口（息抜き穴）がある。

この神衣は瀬戸内町にも一着、民間に保管されている。作業着のような、少し汚い感じの服である。これを着るのは、ションジャやトネヤなどの神屋を造るとき、その成就に先立って、これを「定規持ち」（大工の神）のカミニンジョウ（神人数、女性）が着て、番匠曲尺を持ち、神山から降りてきて、神屋の寸法を測って、正しく造られたかどうかを検査する。

村の人びとは、皆、神屋のあるミヤー（庭）に出て、頭を下げている。上げようとする、定規で叩かれる。

この今里の定規持ちの神衣は走ったり、神屋を測ったりするのによいように、活動的に作ってあるのだろう。これがいつ頃からできたか分からないが、股引は本土のものと同一タイプであり、維新前から用いられていたものであろう。

ほかに、サハリ（鉦）二個、丸鈴二個、脇差し刀二本、杉製神衣類箱（四七.三 cm × 三〇.二 cm × 三〇.五 cm）がある。

四. 名音^{な おん かみぎん}の神衣, 他

名音には、神扇二本、胴衣二着、白サジ二本、大神衣五着、刀二本、サハリ二個、丸鈴一個、ハベラ（蝶）型紙（用途不明）などがある。

これらの中で注目されるのは、胴衣で、一つは、「絹黒茶色胴衣（写真Ⅲの①）」、もう一つは「絹赤茶色胴衣（写真Ⅲの③）」。前者は、衽下と衿下に縦に、二目落し縫いと三目落し縫いが見られる。後者は、衽下をはじめ衿下、脇、衿などに二目落し縫いが見られる。両者、ひもも余計に付いている。

大神衣は、白木綿、芭蕉、絹などの布の別がある。袖付けの下にハベラワキヤツミ（蝶型三角布）の付いた、琉装のものも脇をあけたヤマト式のものもある。

五. むすび

以上、大和村大金久、今里、名音のノロの神衣や神具を見てきた。いずれも貴重なものである。

今回は、特に大和村中央公民館所蔵のノロの龍繡胴衣に焦点をあててくわしく述べたが、この胴衣は私の知る限り、奄美はもちろん沖縄にもないもので、貴重品である。この分析を通して、ノロのことやその服飾の源流、変容、琉球王府の事情などが少しずつ明らかになってくるのである。大切に保管しなければならないものである。

先田光演氏は奄美文化の研究や指導に努力されている方だが、先日、「大和村中央公民館所蔵のノロ遺品（大金久・前田ヤエ冢）について」というパソコンによるレポートを送ってくださった。

撮影は、平成一六年六月四日で、そのときは、すでに大金久のトネヤから大和村中央公民館に移管されたあとであったが、和泊町生涯学習課の東隆志氏が写されたもので、その写真を見ての先田氏の解説である。龍繡胴衣は「絹黄地龍文ドギン」と題して、写真だけにしては実には確かな解説をされている。神扇についてもそうである。また、文書については、氏による正確な対訳も付けてある。以上、記しておくものである。

なお、平成一五年一月以来、現地でお世話になった方々、特に本文中に記した区長さん、案内同行された郁島武正氏、村文化財審議委員会の方々、また平成一六年および一七年、たいへんお世話になった元山安雄氏、その他の皆さんに厚く御礼申し上げるものである。

なおまた、大和村中央公民館には、大金久の諏訪カツエ氏所蔵であった玉ハベラが寄贈され、保管されている。これについての詳しい報告は、別途予定していることを付記しておく。

註

(注1) 鎌倉芳太郎著『沖縄文化の遺宝』（写真篇）（岩波書店、一九八二年）三三四頁、三四四頁。

(注2) 那覇市市民文化部歴史資料室監修「中国・北京故宫博物院蔵—琉球王朝の秘宝沖縄特別展 覧会—図録」（「帰ってきた琉球王朝の秘宝展実行委員会」発行、二〇〇四年）一七～一八頁。

(注3) 宮里正子「漆器」（注2の図解）一三頁。

(注4) 楠山春樹著『中国古典新書 淮南子』（明德出版社、一九七一年）一〇四～一〇六頁。

(注5) 松田稔著『『山海経』の基礎的研究』（笠間書院、一九九五年）二九〇～二九一頁。

(注6) 永尾龍造著『支那民俗誌（第一巻）』（国書刊行会、一九六六年）五〇八頁。

(注7) 依田千百子「朝鮮の龍と蛇の信仰—王権と水神、富と怨霊のシンボル—」『アジアの龍蛇—造形と象徴—』（雄山閣出版、一九九二年）六四頁、六六頁。

(注8) 注7に同じ。六四頁。

(注9) 大韓民国文化広報部編・伊藤亜人監訳、金榮齊訳『韓国の民俗文化財—服飾と信仰資料編—』（岩崎美術社、一九八九年）八〇頁、九一頁、九八頁、一八五頁。

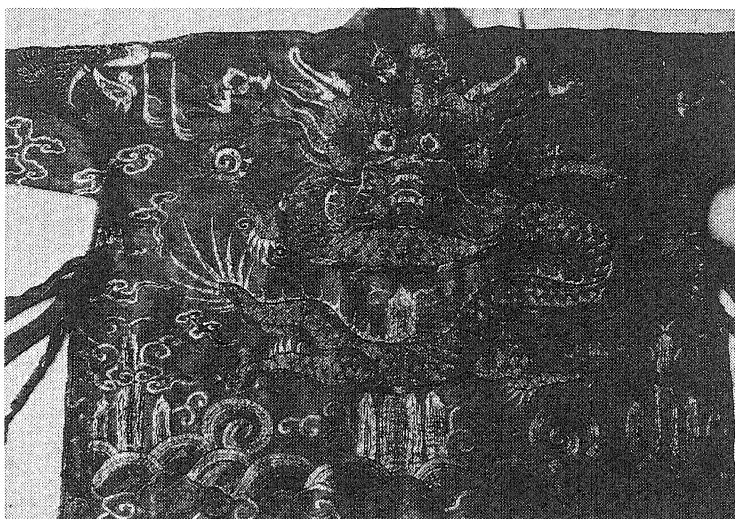
(注10) 吉成直樹「琉球王朝文化と朝鮮半島（1）」『沖縄研究ノート』14（宮城学院女子大学キリスト教文化研究所、二〇〇五年）

(注11) 永井龍造著『支那民俗誌』第一巻（国書刊行会、一九七三年）五一〇頁。

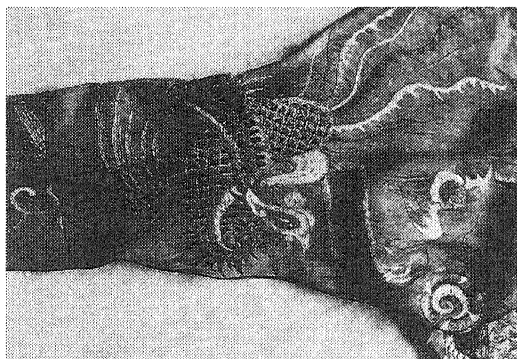
(注12) 注11に同じ。五〇八頁。五一頁。

(注13) 注11に同じ。五一〇頁。

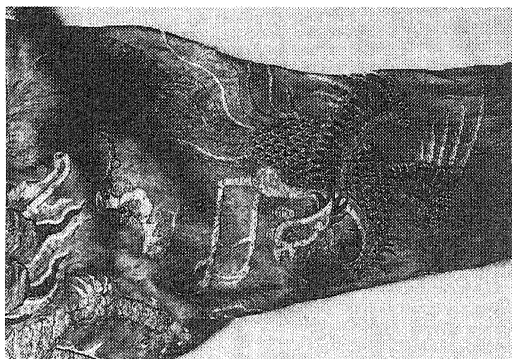
I 大金久の龍繡胴衣（背面）
りゅうしゅうど ぎん



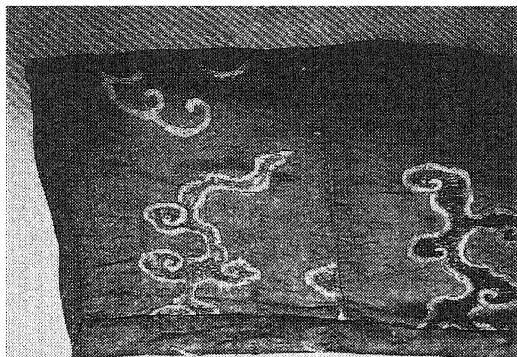
①背面。正面玉龍，嶮山青海波，瑞雲，唐草紋と螭龍雲，蝙蝠，鳳凰
ちりゅううん こうもり



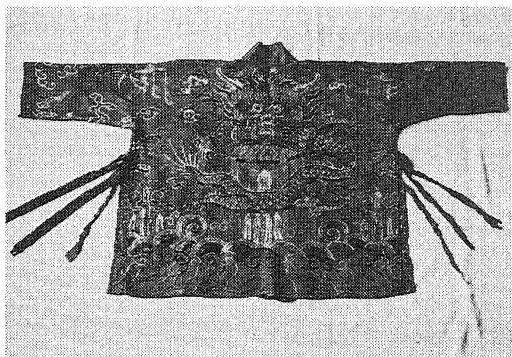
②左袖。鳳凰と蝙蝠。五爪龍が持つ玉
ぎよく



③右袖。蝙蝠と鳳凰



④袖口。唐草紋と螭龍雲

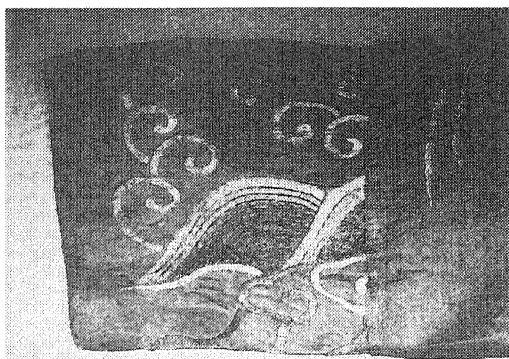


⑤背面全面。ひも（左右脇3本ずつ，左衿下3本，右衿下1本）

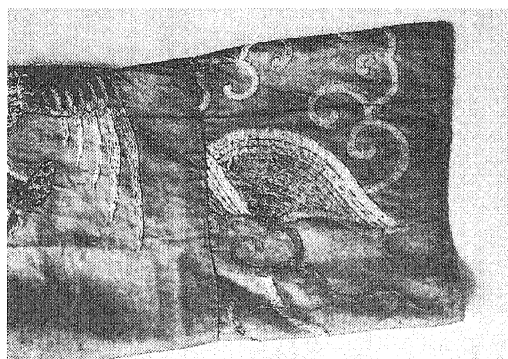
II 大金久の龍繡胴衣（前面）



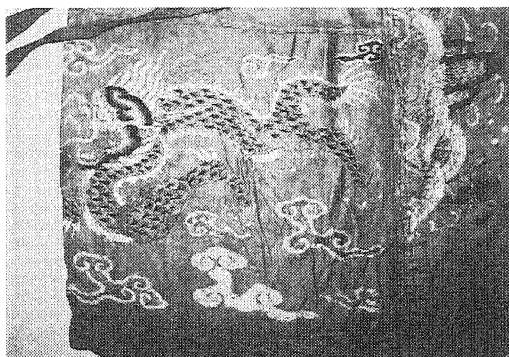
①前面。双龍雲繡。ひもは9本のほかに、中にも1本ある。おくみ左衽布には嶮山青海波が裾に付いている



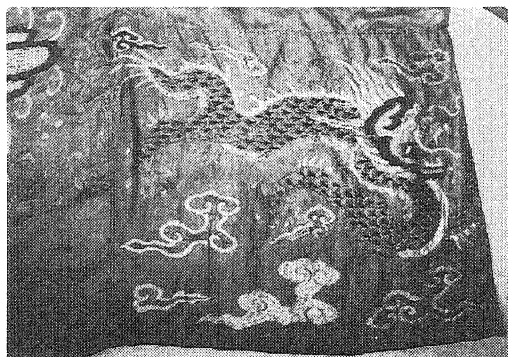
②右袖先端。海波と唐草紋



③左袖先端。海波と唐草紋

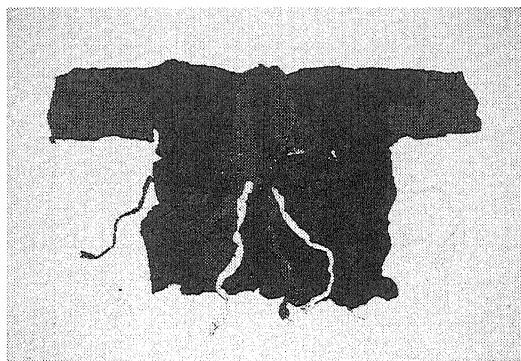


④前右裾（右前見頃）の五爪飛龍。ごそう螭龍雲

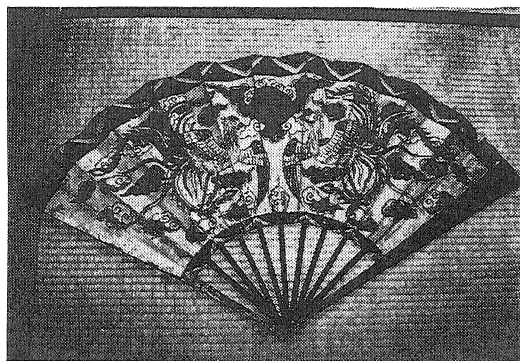


⑤前左裾（左前見頃）の五爪飛龍。螭龍雲

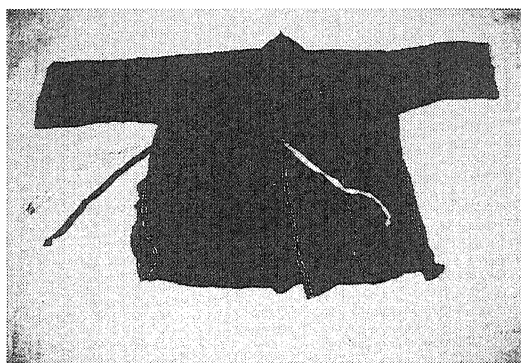
Ⅲ ^{な おん かみぎん} 名音の神衣（胴衣）と ^{かみおうぎ} 大金久の神扇、^{せ く} 今里の丈規持ち（大工神）の神衣



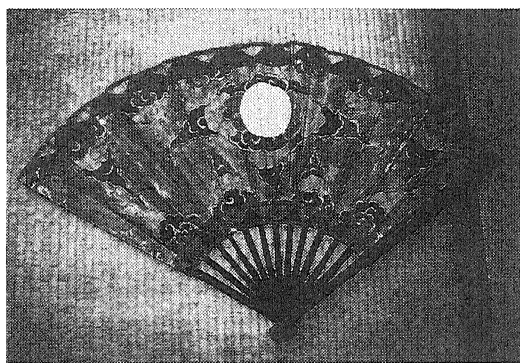
① 絹黒茶色胴衣（^{な おん} 名音）



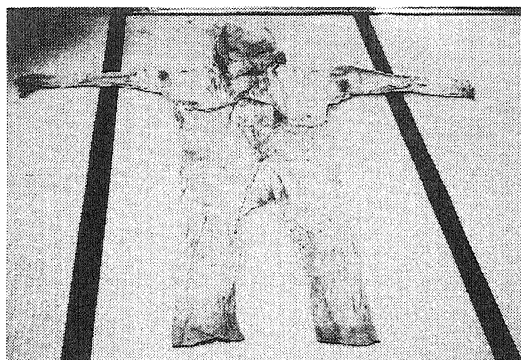
② 黄地日輪双鳳凰瑞雲神扇（大金久(1)の表面）



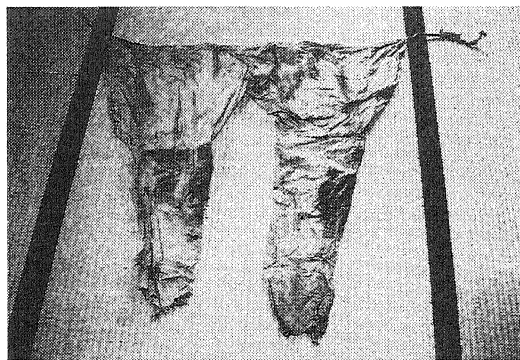
③ 絹赤茶色胴衣（^{な おん} 名音）



④ 青月輪瑞雲神扇（大金久(2)の裏面）



⑤ 頭巾・上着・股引一体型の丈規持ち神衣（今里）



⑥ 丈規持ち神衣（大工の神）の神衣，股引（今里）